



三疋田 四疋田  
 四神田に 五桂  
 五佐奈 条里制の  
 名残りの地名

大化改新の後、国は人民に土地を分け与えて税を納めさせる班田収授の法を実施。円滑に進めるため、条里制によって土地を区割りしたと伝わる。

多気町内にはちよつと変わった地名がたくさんあります。弟国や兄国。これは「おおぐに」と「えくに」とよみます。油夫と書いて「ゆぶ」、色太が「しきふと」これらも読みにくい地名ですね。

でも、なんとと言っても面白いのは数字のついた地名です。三疋田、四疋田、四神田に五桂、五佐奈などがそれ。

これらの地名はまだ日本の国の土台がしっかりできる前、世の中の仕組みを作ろうとした大化改新の時につけられた名前です。国は人々に土地を分け与

えて米を作らせ、税として納めさせることにしました(班田収授の法)。

この時、碁盤の目のように縦横に土地を区割りして三の疋田、四の疋田という具合に地名をつけたのです(条里制)。四の相可とか五の疋田という地名も昔はあったようです。

相可ののびのびパーク天啓の涵翠池(天啓池)の堤防から下を見ると今は現代的な整地がされ四角い田や畑がきちんと並んでいます。ここは昔から碁盤の目のように区切られた条里制の名残の田んぼが残っていたそうです。



## 沈み橋

### 大雨降ったら

### 沈んじやう

増水時は水に浸かり流出を防ぐコンクリート製の橋。町内櫛田川には古江く下出江、牧く御麻生園(松阪市)、波多瀬く深野(同市)間に計3ヶ所の沈み橋がある。沈下橋ともいう。

水が増えると隠れてしま  
う沈み橋。多気町内の櫛田  
川には古江と下出江の間、  
牧と御麻生園(松阪市)の間、  
そして波多瀬と深野(松阪市)  
の間に三つもあります。沈  
下橋ともいいます。

コンクリート製のこれら  
の橋は幅がせまく自動車は  
通れませんが、雨で増水す  
ると水に浸かって渡れなく  
なります。なぜこんな橋が  
造られたのでしょうか。

川があるために、そして  
橋が近くにないために、目  
の前に見えている土地へ行  
くにはずいぶん遠くへ回り  
道をしなければならぬとい  
とがあります。人々の毎日

の暮らしに便利なように橋  
を造りたい、そんな場所へ、  
あまり費用をかけずに造る  
ことができるこんな橋がで  
きたのです。

普通の橋は洪水の時など  
流れてきた材木などが橋脚  
や橋げたにひっかかり壊れ  
ることがあります。でも沈  
下橋は大水の時はすぐ水の  
下になって、欄干もありま  
せんから流木などの影響は  
あまり受けません。

昔は浅い川なら徒歩で渡つ  
たり、大きな石と石の間に  
板を渡して橋にしました。  
沈み橋は川を身近に感じて  
いた昔の人の気分を少し味  
わえるような気がします。



すいぎん  
水銀で  
なら 奈良の大仏  
だいぶつ  
つくったよ

奈良の都で七四九年に造立された東大寺大仏の鑄造には丹生採掘の水銀(伊勢水銀)が使われた。奈良時代から鎌倉時代頃まで盛んに採掘され、水銀座という組合まであった。

丹生は丹(＝水銀)を産する  
という意味の地名。当町の丹  
生も水銀が採れる町でした。  
金属でありながら常温では  
水のような水銀は「みずかね」  
ともいわれ、不老長寿の薬な  
どと有難がられました。  
奈良時代に造立された東大  
寺大仏の鑄造には金で鍍金が  
施されており、使われた多量  
の水銀は丹生水銀とされてい  
ます。銅製の下地の表面に金  
を水銀と混ぜたものを塗り、  
後で水銀が蒸発する温度まで  
加熱して金だけを残すのです。  
水銀がとれる辰砂という石  
は、奈良時代から鎌倉時代頃  
まで盛んに採掘され、丹生に  
は仕事仲間の水銀座という組  
合もありました。『今昔物語

集』には丹生のこととされる  
水銀の話があります。水銀掘  
りの男が落盤事故にあった時、  
信心していた地藏菩薩に助け  
られる話、そして京へ向かう  
水銀商人が鈴鹿峠で山賊に襲  
われ蜂に助けられる話です。  
水銀を原料に射和で作られ  
た伊勢白粉は好評でしたが、  
やがて丹生水銀が採れなくな  
り、中国から輸入までして製  
造しました。伊勢白粉で富を  
蓄えた伊勢商人もありました。  
有用な物質として様々な使  
用されてきた水銀は現在、そ  
の有害性から使用などに法規  
制が設けられています。  
平成28年、辰砂は日本地質  
学会が選ぶ三重県の石の鉱物  
部門に選定されました。



## 勢和の森

# マウンテンバイクで

# 駆け巡る

二〇一三年、古江の勢和台スポーツセンターに作られたMTBのコース。

昭和55年に造成工事がはじまり、56年に愛称が公募で選ばれた勢和台スポーツセンターは野球場やテニスコートがある村民の運動場として利用されてきました。周りの山を利用して勢和の森マウンテンバイク(以下MTB)パークがオープンしたのは平成25年のことです。山の高低を利用した自転車競技に日本中、世界中から多くの人々を集めたいという思いを込めて地元古江の人々の協力で作られたもの。プロデュースしたのは北京オリンピックMTBチーム監督と現MTBダウンヒル日本代表という本格的な

コースです。多気町スポーツ協会が中心になって事業を行っています。MTBのレースはダウンヒルとクロスカントリーがあり、ここは全長5.4kmのクロスカントリーコースです。平成26年にはじめて日本自転車競技連盟の公式レース「勢和多気MTBレース」2クロスカントリーを開催、平成27年には初の国際大会「勢和多気国際クロスカントリー」を開催しました。「ヤマジテカップ」は未就学児から参加できるキッズレースや2時間耐久レースなどもあり広く参加を募っています。



聳えたつ  
十一面観音  
近長さん

長谷の近長谷寺は八八五年、飯高諸氏が創建したと伝えられている。同寺の丈六・六メルの十一面観音立像と財産目録の「近長谷寺資財帳」は国の重要文化財に指定されている。

長谷の城山のお寺。長谷にあるから「はせでら」ならわかりますが、お寺の名は近長谷寺。「きんちようこくじ」とよみます。

平安時代の九五三年に作成された「近長谷寺資財帳」はお寺の財産目録です。当時の地名や人の名前なども知ることができる貴重な史料で、国の重要文化財に指定されています。

資財帳に書かれている「金色十一面観音書躰」。今ご本尊としてまつられている巨大な十一面観音像に金色の名残はありませんが丈が六・六メもある国の重要文化財です。大和(奈良県)

長谷寺の観音像と同じ木で作られたと言い伝えられています。この観音像は地藏菩薩のように手に錫杖(杖)を持っていて長谷寺式という形で、今、右手に添えられている錫杖は徳川家康の十男で初代紀州藩主の徳川頼宜が寄進したものです。

近長さんと呼ばれ親しまれる近長谷寺は現在、無住のお寺で、地元の人々がお守りし、土日曜日と祝日に拝観することが出来ます。

近長の近は津市にある遠長谷寺と比べて伊勢神宮に近い方という意味だとも、大和長谷寺への遠近を言うとも言われています。